ジャワ島の公共住宅における住様式の動向に関する研究
-PERUMNASが開発した２つの住宅地を対象として-

ヘニ　オクトリヤニ　ウイジャヤ

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

住宅は社会を反映しているものである。住宅と都市空間は、個々の家庭のレベルを超え、社会的な事項である。インドネシアはいくつかの文化的な変遷を経験し、ジャワ島(**図1**)を含むインドネシア群島全体で様々な住宅の形状を生成してきた。本来、民族の違いに基づくジャワ島の伝統的な住居形式および住様式にはいくつかの種類があった。本研究はジャワ民族とスンダ民族というジャワ島における最大の2つ民族を取り上げる。両方の伝統的な住居(**図2**)は、居住者の神様と人間の関係を表すものであるというマクロコスモスとミクロコスモスの概念を大事にしていた。神様との関係のためには特別な空間を設け、そこで儀式的な行為をしていた。また、人間との関係を表すものとして接客室 が設けられていた。

その後、オランダ植民地時代のコロニアル住宅が普及してきたが、国家独立後の住宅不足が起こったため、インドネシア政府は公共住宅の大量生産の開始を余儀なくされた。1974年にPERUMNASというインドネシア住宅公社が確立され、全国で大規模な住宅開発が始まり、いくつかの住宅のタイプを導入してきた。PERUMNASによる公共住宅は大量生産のため、住宅の標準化が起こっており、そのためジャワ島全体で公共住宅の住様式の動向は一様になると考えられる。本研究では、ジャワ島におけるPERUMNASが供給した公共住宅の標準的な住宅タイプの事例に対して、現地調査、図面採取、ヒアリングを行い、住居サンプルの生活行為の分析を通して住様式の動向を明らかにすることを目的としている。

1-2. PERUMNASの概要

PERUMNAS(プルムナス)はインドネシア住宅公社であり、全ての株式は政府が所有している。1974年7月18日に設立してから、ジャワ島を含むインドネシアの大都市で様々な住宅タイプで大規模な公共住宅を開発してきた。最初は戸建て住宅の開発を行っていたが、1980年代から集合住宅の開発を始めた。1992年から1999年までにPERUMNASは全国で50%の住宅を供給していた。

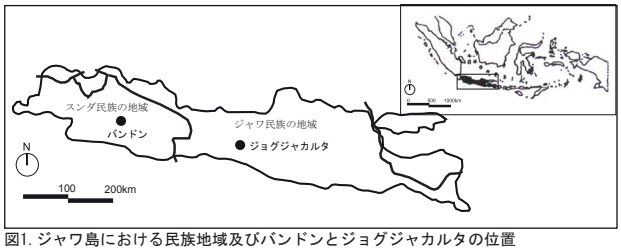


図1. ジャワ島における民族地域及びバンドンとジョグジャカルタの位置
1984年の Ron Hatley's 地図をもとに作成

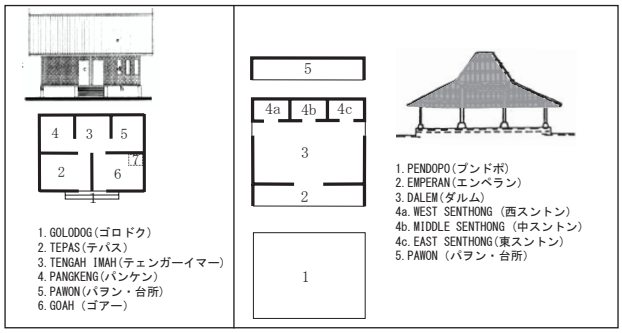


図2. ジャワ島における伝統的な住居形式、スンダ民族(左)、ジャワ民族(右)

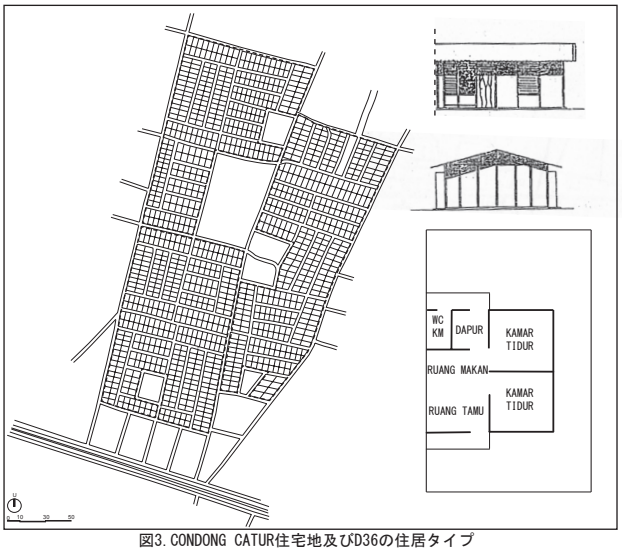


図3. CONDONG CATUR住宅地及びD36の住居タイプ

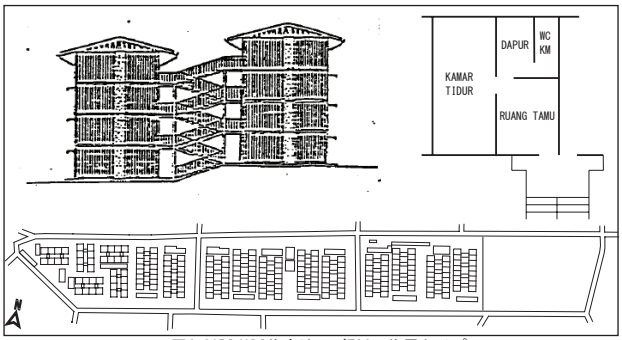


図4. SARIJADI住宅地及びF36の住居タイプ

RUANG TAMU(ルアン　タム)..... 客室	DAPUR(ダプル)..... 台所
RUANG MAKAN(ルアン　マカン)..... 食堂	WC/KM..... トイレ・浴室)
KAMAR TIDUR(カマル ティデュール)... 寝室	

PERUMNASによる住宅は、家族の基本ニーズを満たすものであると考えられ、基準プランでも家族が正しく生活し、健康を維持することができるということを目標として供給さ

れた。PERUMNAS住宅は基準プランのタイプによる様々な名称があるが、住宅の床面積による呼び方ほ一般的である。

1-3. 調査対象と調査内容

本研究では、ジャワ民族の地域に位置しているジョグジャカルタのCondong Catur住宅地およびスンダ民族の地域に位置しているバンドンのSarijadi住宅地を対象とし、ジャワ島の2つ都市における公共住宅の事例を取り上げる。両方の住居プランはほぼ共通であり、どちらも４人～５人の核家族のための36型である。

Condong　Catur住宅地は戸建て住宅地であり、21ヘクタールで1233戸が供給されたジョグジャカルタで最初にPERUMNASが開発したものである。1976年に開発が始まり、ほとんどの住民たちは1978年から住み始めた。Condong　Catur住宅地の調査対象は16戸であり、全てのオリジナルタイプはD36タイプという36㎡の床面積を持つ戸建て住宅タイプであり、全島で最も一般的な公共住宅の標準タイプである。PERUMNASの図面によると(**図3**)、このタイプは３つの部屋、小さな台所、トイレ・浴室で構成されている。

一方Sarijadi住宅地は4階の集合住宅であり、1979年から1980年にPERUMNASによって建てられ、総面積は3,5ヘクタールで1056戸が供給された。この住宅地はPERUMNASが建設した最初の集合住宅である。Sarijadi住宅地の調査対象は15戸であり、全てのオリジナルタイプはF36タイプという36㎡の床面積を持つ集合住宅タイプである。PERUMNASの図面によると(**図4**)、このタイプは２つの部屋、小さな台所、トイレ・浴室で構成されている。

両方の住宅地の調査対象の内、それぞれ５戸の住居サンプルをとり、2012年8月22日から28日までに住様式に関わるヒアリングおよび図面採取でより詳しい調査を行った。

2. ジョグジャカルタの戸建て住宅地‘Condong Catur’

2-1. 居住者属性

図5によると、Condong　Catur住宅地の持家率は100％であり、16戸中14戸は直接PERUMNASから住居を購入している。また、詳しくヒアリングを行った5戸の住居サンプルの中で、ほとんどの家族はこの住宅に住み続けてきたため、家主は第二世代であり、また拡大家

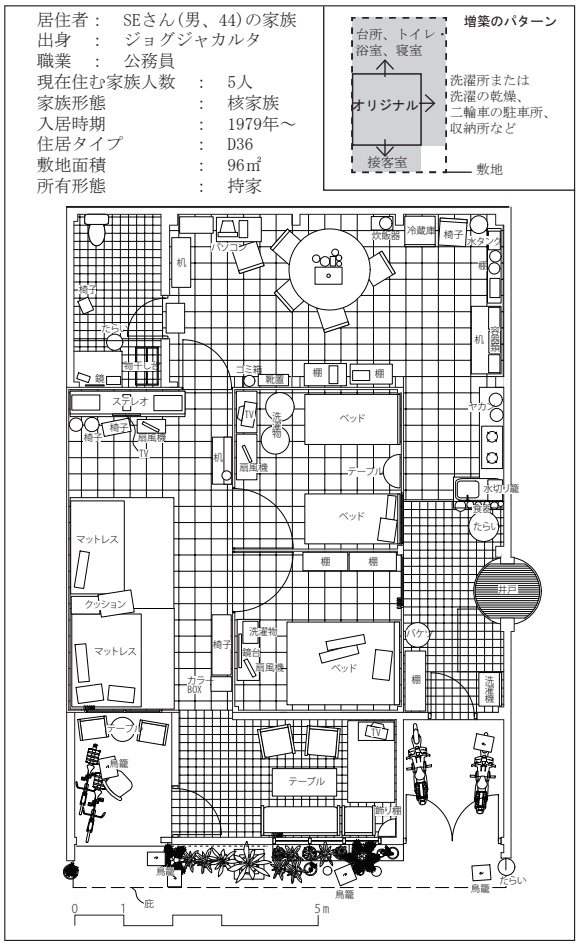


図6. CONDONG CATUR住宅地のSE宅

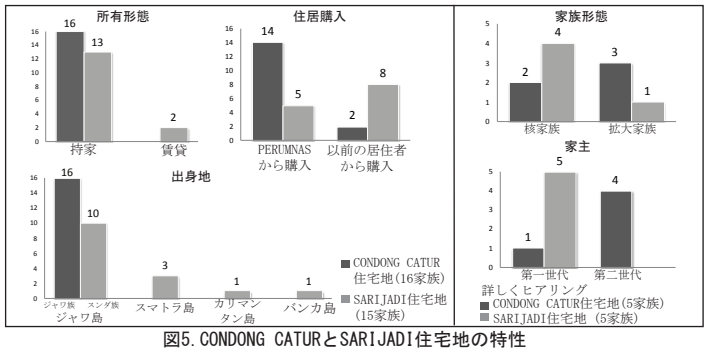


図5. CONDONG CATURとSARIJADI住宅地の特性

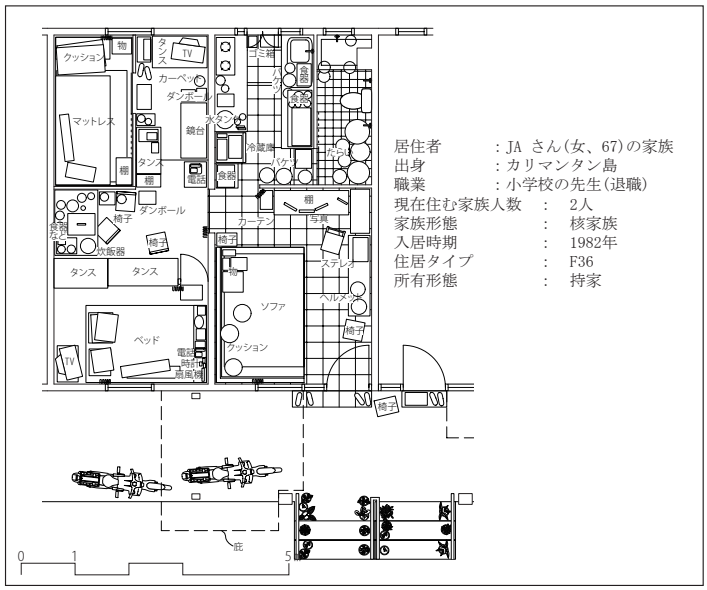


図7. SARIJADI住宅地のJA宅

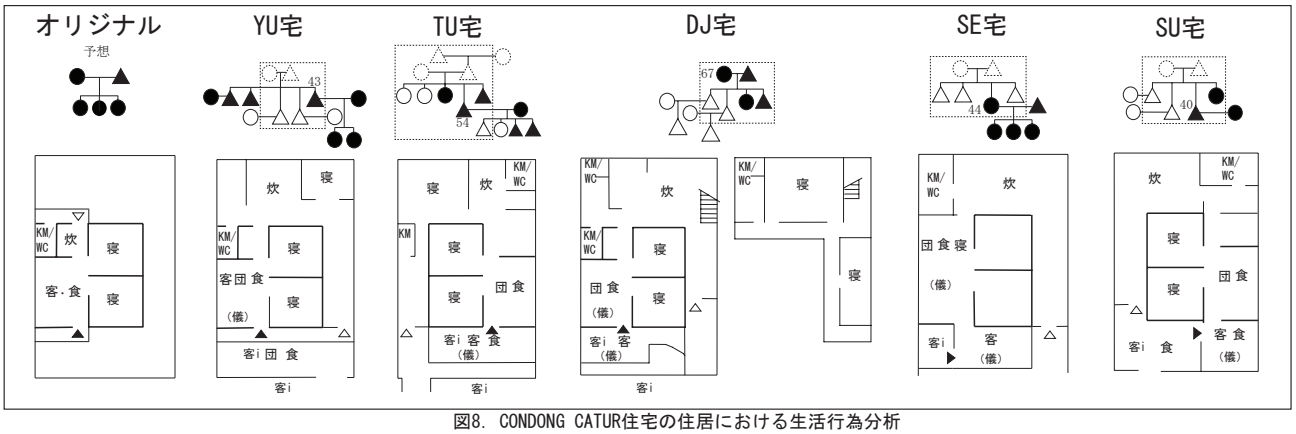


図8. CONDONG CATUR住宅の住居における生活行為分析

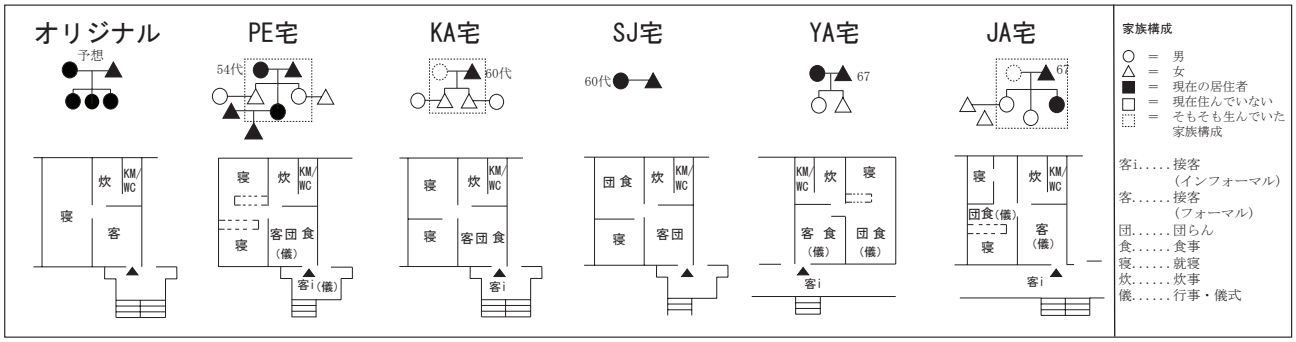


図9. SARIJADI住宅の住居における生活行為分析

族が多い。

2-2. 増改築

Condong Catur住宅地では、全ての住居サンプルの家族は住み始めてから、家族のニーズを基づき様々な増築行為を行っており、オリジナル部分から、前、後、側方へ敷地一杯増築することが一般的である。具体的に見ると、**図6**に示しているものは一つの事例であり、現在のSE宅の図面である。SEさんの家族は、ゲストが多かったため、1986年ごろに前方へ増築を始め、接客室を造った。その後、1990年に後方へ増築し、台所とトイレ・浴室をそこに移動した。また、子供たちが大きくなったときに、寝室が足りなくなることを予想したため、将来は2階に増築できるように、2011年にRC構造に改造した。

2-3. 住生活

本研究では詳細な生活では家族の住生活の特徴を捉えにくいため、住居学での生活行為分類[1)]を参考に、「接客」、「団らん」、「食事」、「就寝」、「炊事」、「行事・儀式」という生活の行為を取り上げる。また、ジャワ島の文化及び現地観察をもとに、ゲストに対する「接客」という行為はインフォーマルとフォーマルがあると考えられる。インフォーマルな「接客」はただ通っている人や近所の人たちと挨拶したり、短い時間座って雑談したりするという行為である。また、フォーマルな「接客」はインフォーマルな「接客」と比較すると、より正式な訪問であり、家族も飲み物やお菓子を用意するという行為である。

・「接客」、「団らん」、「行事・儀式」に関しては**図8**によると住居の前方へ増築することによって「接客」の空間を造る傾向がある。フォーマルな「接客」ということは住居の前にある半屋外または屋内でする。インフォーマルな「接客」は敷地から前にある通りまでに拡大する事例がある。また、PERUMNASが供給した「接客」室は現在「団らん」の空間になる傾向がある。「行事・儀式」は「接客」の空間ですることが分かったが、「団らん」の空間まで拡大する場合もある。

・「食事」に関しては、住居サンプルには全て台所にダイニングテーブルがあるが、ヒアリングによると家族はそこで食事するよりも、「団らん」や「接客」と同じ空間で「食事」をすることの方が多いことが分かった。

・「就寝」の空間は他の行為と区別することが分かった。また、寝室の分け方としては、親また男が前方の寝室を使用する傾向があり、子供はほぼオリジナルプランの後方の寝室を使用している。

・「炊事」の空間は住居サンプルの後方へ増築した部分に移動する傾向がある。ヒアリングによると、行事や近所の集まりを行うときに、台所で近所の人たちと一緒に調理をしたりすることがよくあるため、広い台所

のほうがより動きやすいという。また、その「行事・儀式」のために、料理道具を多く準備しているので、広い台所のほうがより収納することができる。

3. バンドンの集合住宅地 'Sarijadi'

2-1. 居住者属性

図5によると、Sarijadi住宅地の場合は持家率は87%しかなく、以前の居住者から購入したのは多い。つまり、Sarijadi住宅には居住者の入れ替わりの傾向があるといえる。そのため、家族の出身地はジャワ島に限らなく様々であることが分かる。また、Sarijadi住宅は子供たちが結婚してから離れて暮らすようになったため、家主は第一世代であり、または核家族のほうが多い。

3-2. 増改築

Sarijadi住宅地の場合は増築することが不可能であるため、家族はニーズに基づき住戸の内側に間仕切りを作り、いくつかの部屋を区別することが一般的な行為である。具体的に見ると、**図7**に示しているものは一つの事例であり、現在のJA宅の図面である。JAさんの家族は板と家具を使って間仕切りを作り、2つの寝室と食堂を造った。現在一緒に住んでいる子供は一人であり、結婚した子供はこの住戸から出たが、同じ建物の2階で住んでいる。Sarijadi住宅地にはこういう事例がよくあるという。

3-3. 住生活

・「接客」、「団らん」、「行事・儀式」に関しては**図9**によると、Sarijadi住宅地には屋外の空間は供給されていないため、フォーマルな「接客」は全て屋内の入り口の後ろに位置している部屋で行う。奥方へ「団らん」の空間を設けるために、間仕切りを作った事例がある。また、いくつかの家族により住戸で「行事・儀式」をするよりも、一階にある共有ルームでする方がよいという。

・「食事」に関しては「団らん」や「接客」と同じ空間で「食事」をすることが多いことが分かった。

・「就寝」の空間は他の行為と区別することが分かった。また、寝室の分け方としてほ、親は前方の寝室を使用する傾向がある。

・「炊事」の空間はオリジナルプランと変わらないが、キッチンテーブルを作り、テーブルの下に料理道具を置いている。

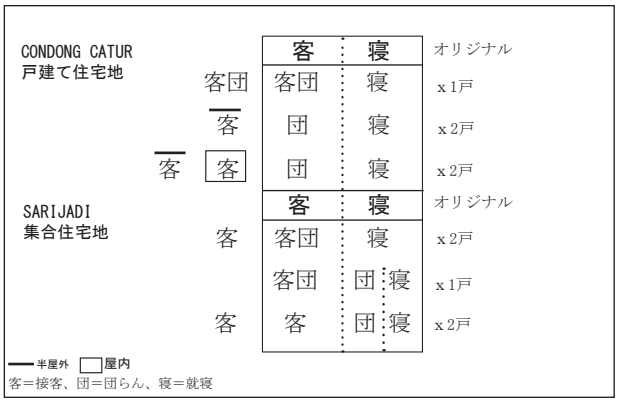


図10. 「接客」と「団らん」のパータン

4. 比較考察

両方の住宅地の生活行為の分析の上で住様式に関わる比較考察は以下の通りである。

・「食事」は他の生活行為と重なる。つまり、「食事」という行為は柔軟性があるといえる。

・「就寝」のための空間は他の行為と区別することが分かった。寝室の分け方としては、親また男が優先であり、前方の寝室を使用することが分かった。

・「接客」と「団らん」の空間の区別はPERUMNASのオリジナルプランでは考慮されていない。それはPERUMNASが大量生産のコストを削減するために、最も基準的な空間構成を成立したこであるためが、家族は住始めてから、「接客」と「団らん」の空間を区別して設ける傾向がある(**図10**)。

・戸建住宅と集合住宅の違いがその後の住宅のあり方に大きく影響している。戸建住宅では，設備の充実等だけでなく，大幅な空間拡大ができ、拡大家族的住み方を可能にしている。一方、集合住宅では，空間拡大が制限されるが、結婚して住戸から出た子供たちが親の近くに住む事例が見られるため、同じ住戸ではなく同じ建物に拡大家族が住んでいるといえる。

・両方の住宅地には接客の空間を設ける傾向があるからこそ家族は人間関係を住居に反映させているといえる。これはジャワ島の伝統的な住居における住様式と同じものであると考えられる。しかし、民族による住様式の違いは公共住宅の住まい方に残っていることが薄まっているといえる。

参考文献

1.Masami Okabe and Yoichi Ito：A Basic Study on The Lifespace of The Extended Family at Rural House to Research The Relation Between The Unit of Family and Their Lifestyle, AIJ No. 477, 125-132, Nov 1995

2.Yoyok T.WS：: The Spatial Structure of the House Unit based on the Distribution of Living Activities in Vernacular Settlement and Public House Estate. Graduate School of Engineering, Osaka University.

3.Johan Silas. 1995. Perum Perumnas dalam Tantangan Tugas, hasil perjalanan 1974-1994. (in Indonesia Language)